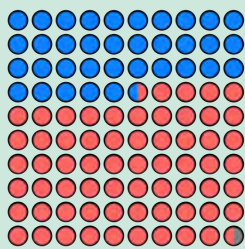


# 大学ラグロスアスリートの脳振盪に関する実態調査結果

2021年度調査結果の概要



総回答者数, 3132名

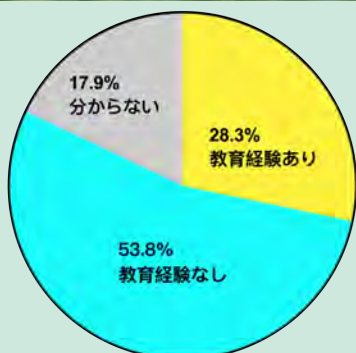
本アンケート調査は2021年8月16日～9月12日にオンラインにて実施されました。全会員の約37%の方々にご協力いただきました。

本調査に参加した大学ラグロス選手の中で、**脳振盪の経験がある者は全体の8.5%**

脳振盪に関する資料を受け取ったことがないと解答した者が多く（33.5%）、日本ラグロス協会から発信された資料を認識していた者は全体の25.2%でした。

学生トレーナー（16.0%）やチームメート（10.7%）が情報源と解答した人も比較的多くみられたことから、チームによっては積極的に教育活動をしていることも伺えます。

脳振盪とは関係のない症状を誤って脳振盪の症状と回答した者は、**全体の60.4%**



7割以上の大学生ラグロス選手は脳振盪に関する教育を受けたことがないことが明らかになりました。

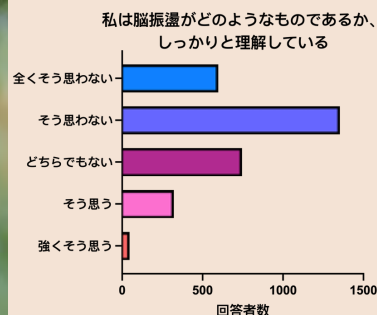
脳振盪教育を受けたことがあると解答した者は**全体のわずか28.3%**

脳振盪になったことを隠していた理由の**1位は「重症ではないと思ったから」**

脳振盪になったことを隠した他の理由で多かった内容：

- 初めは脳振盪とっていなかった
- プレータイムを失いたくなかった
- 病院に行くことが面倒だった
- 試合を欠席したくなかった

「プレーをどうしても続けたい」とう気持ちを抑えるためには、正しい知識だけでなく、申告しやすいチーム環境づくりも重要かもしれません。



名称は聞いたことがあっても、自信をもって脳振盪がどのようなものであるか理解していると考えられる者はまだまだ少ないことがわかりました。

日本ラグロス協会の医科学委員会ではセーフティーガード講習の充実化や、Safety Time Out制度の導入などを通じて、ラグロス活動中の安全向上に努めています。本調査の結果から、スポーツ関連脳振盪についてはさらなる啓発活動が必要であることが明らかになりました。スポーツ関連脳振盪を疑った際は、症状を軽視せず、指導者やメディカルスタッフに申告しましょう。早期の認知と対応は、早期の競技復帰の可能性も高めます。

研究実施責任者：  
日本ラグロス協会医科学委員会委員  
早稲田大学スポーツ科学学術院准教授 細川由梨